

公教育への提言 これまでの現状分析 (その1)

— やってきたことの意味づけは —

AIA実践力フォローアップ

T・H・E
P・O・W・E・R
O・F
P・A・R・E・N・T・I・N・G



(グループダイナミックス研究所のロゴマーク)

子育て問題について
の松崎学教授の提言

(松崎学氏:山形大学大学院
教育実践研究科 教授)

果たして、日本の公教育（啓育・education）は 修正しがたいものなのか

21世紀が1/5終わってしまった。しかし、公教育は順調に不登校などの問題を産出し続けている。一刻も早く、21世紀の教育を創出し、そういった問題に一区切りできる公教育であってほしいところだ。

振り返り① 不登校について

平成10年以降から高止まりしていた小中合わせて12-13万人の不登校数が、ここ5-6年前からあらためて増加している。令和元年度にはついに中学校だけで12万人台に突入した。少子化が進んでいることから考えると、その出現率は公教育として、やむを得ないものなのだろうか？

昭和の時代には登校拒否と言われていて、昭和40年くらいからのデータが残っている。1992（平成4）年に文部省は“不登校は誰にでも起こりうる”として、不登校の定義も年間欠席日数を50日から30日に短縮した。

そして、その対策として、1995（平成7）年から「スクールカウンセラー（SC）」を導入した。しかし、その‘90年代に不登校は急増し続け、1998（平成10）年あたりから上記のように高止まり状態となる。ということは、SCは不登校出現率を低下させることには貢

献しなかったと言える。つまり、不登校になってからの相談などが主であり、その予防には貢献できなかったのだ。実際、学級状態を測定するQ-Uアンケート（河村, 1999）では、全国平均分布が「ナナメ型」（荒れ始めの集団）となっており、不登校やいじめを生み出す学級システムになっていることがわかる。

こうして、登校拒否と言われた時代からすでに半世紀あまりが経っても、効果的な対応策を見出せていない現実のようである。

振り返り② いじめについて

中学校にはパワフルな生徒たちもいた。

いじめ問題については、昭和60年代にいじめによる自殺が社会問題化したが、その背景には、昭和50年代から荒れる中学校が出現・増加し、学校は、力でそれを押さえ込もうとしたのだ。

その前から校則による締め付けなどに反発していた生徒たちであったかもしれないが、それを力で押さえ込まれた生徒たちのエネルギーは、もはや教師に対してではなくその矛先をより下位の生徒に向けるようになった。それが当時の“いじめ”であったかもしれない。そして、最悪のケースが、いじめ自殺な

どで上述の社会問題としてマスコミ等を賑わすことになった。

その後もいじめ問題は後を絶たない。2013年、いじめ防止対策推進法が制定されるが、それはいじめ発生後の対処法を規定しており、その予防には効果的とは言えそうにない。

SCは、いじめに対しても対応するが、こちらも予防に対しては効果的な対応策を見出せていないように見える。不登校同様、いじめなどの関係性攻撃を生み出しているのは、学級の人間関係のひずみなのだと理解できる。

関係性の変化に気づきにくい

こうして、この半世紀くらいの間で、教育問題として生じた事柄を振り返ってみた。

1998年か翌年かの秋、自宅にいて何気なく、「サザエさん」の30周年記念番組を見た。30年前のモノクロのアニメが放映されていた。カツオくんが悪さをすると、波平お父さんが、「こら、カツオ！」とゲンコツを与えていた。……ああ、昔はそれがふつうだったなあと思いながら見た。…そして、あれ、最近のサザエさん家はどうなっているんだという疑問が湧いた。しばらくまじめにカツオが悪さをする場面を待ち望んだ。…そのときが来た。しかし、波平お父さんのその対応はというと、“カツオ、そこに座りなさい。どういことなんだ？”と聴く耳があり、かつ、聴き終わったあと、“うん、カツオ、お前の気持ちもわかる”というような反応だったのだ。

ちょっとした驚きだった。30周年記念番組ということで、30年前と今とを、その時代を象徴しているであろう「サザエさん」を見て、その変化を明確に認識できたのである。

当時、他のテレビ番組で「アハ一体験」も経験した。一つの画像の一部が時間とともにじわじわと変化していく、あれだ。ほとんどその変化に気づくことにならない。しかし、Before-Afterのかたちで並べて見せられたりすると、一目瞭然である。すぐにその変化を見つけられる。

我々は三次元世界に住み、時間軸に関しては共有している。そして、世界がじわじわと微妙な変化を見せながら、動いているもの、特に人間関係のあり方などについては、その変化を意識化することは難しいようである。

平成に生まれて育っていた子どもから、そ

のことも教えられた。一つは、幼稚園年中児から。彼の遊びを見ていて、彼がそれとなく話しかけてきて、「へえ、そう」などと相づちを打ちながら聴いていたら、文脈が変わり、「あのね、ぼく、ときどき悲しくなるんだ」というのだ。で、私としては、「へえ、どんなとき？」と聴いてみた。すると彼は、「あのね、お父さんやお母さんに“おまえ”って言われたとき」というのだった。“ええっ、我々が子どもの頃は、親からそんな呼ばれ方されても、そんなのがふつうだったぞ。今時の子どもは、違うんだ”と少し感心したのだった。

いくつかの事例が重なり、私の中では、ああ、平成に生まれて育ってきたこの子たちは、自分が尊重されない扱いを受けていることに対して敏感に感じ取ることのできる力が育ってきているんだと理解した。

あらためての振り返り： 社会の変化の陰で

グローバルゼーションによって、民主主義がさらなる広まりを見せつつあった時代だ。医療現場では“インフォームド・コンセント”で、患者-ドクター関係がタテからヨコに変わろうとしていた。教育現場でも1989(平成元)年の学習指導要領などで“子ども主体の教育を！”“生きた学力を！”という柱が打ち出され、その挑戦が始まっていた。だが、当時のある正直な先生は「いかに子ども主体の教育をやっているかのように見せかけることに一生懸命になっています」と教えてくれた。

1995年には実習視察で1年生学級に行くと、教室内の廊下側の壁には“自分で考えて、行動できる子ども”とあった。その横にはしかし、その先生らしき筆跡で、“1じかんめこくご、2じかんめさんすう、ちゅうかんやすみぐらうんど、…”と書かれてあった。…ああ、この先生、子ども主体の教育をがんばろうとしているのだろうけど、…結局、中間休みの時間をどこで過ごすかは先生が決めてしまっていることに、先生自身が気づいていないということか……かたちだけの民主主義を続けてきていて、つまり、内実は、タテの関係性で“先生が上、子どもが下”を、指導要領が求める“子ども主体の教育を！”に向けてどう具現化したらいいかわからないということなんだ、と感じた。しかし、そうい

う世間の風潮にさらされて生きてきた幼児たちは、昔とは違う新たな関係性を求めているのかもしれないと感じた。

しかし、そういう中であって、当時の文部省が提唱したのは“ほめて育てよう”だった。**理念（P）**は“子ども主体の教育を！”を求めつつ、その**方法（D）**は“ほめて育てよう”だった。“ほめる”価値観の主体は教師に残したまま、タテの関係性を維持してしまったのだ。教育現場は、そのことに疑問を持つことなく、“ほめて育てる”ことを実践していった。…子どもは育ちが変化してきていたかもしれないのに。

その結果（C）：国際調査結果

2000年代の国際調査結果は、ほぼ一貫して、“日本の若者の**学力は十分高いが、自尊心や学習意欲が低い**”ということだ。

“知育偏重”は簡単には変わらない。オウム真理教の事件後は一時的に、“頭だけが良い子を育てればいいわけではないんだ”という機運が生まれたが、ほとんどすぐに元に戻った。教育基本法では、一応、「人格の完成をめざす」ことが謳われているが。

自尊心が低いのは、一つには“ほめて育てよう”が貢献した可能性は否定できない。

“ほめる”のはタテのコミュニケーションであり、子どもをコントロールし、子ども間には競争を生み出し、競争の結果として先生によくほめられる者とそうでない者を創り出す。いわゆるスクールカーストである。また、子どもには他者評価で自分の価値を決める生き方を身につけさせることも。

Rosenberg(1965)によれば、自尊心には2側面がある。“**Very good!**”と“**Good enough**”である。前者は、社会的評価基準で他者から認められたときに自分の存在価値を見出すことのできるといった側面の自尊心である。後者は、自己内価値基準で、成長/進歩しつつある自分を感じて“自分は捨てたものではない”と思える側面の自尊心である。彼は、“ホンモノの自尊心”は後者だとする。そして、最近では、その構成概念妥当性がデータによって実証されてきている(伊藤・川崎・児玉, 2011)。平たく言えば、前者は「優越感」を意味し、心理学的には随伴性自尊心という。後者は「本来感」で、ありのままの自分でいられる感覚ということだ(伊藤・児玉, 2005)。

ところで、“ほめる”によって育つのはどちらかと言えば、前者であることはすぐに理解できるであろう。例えば中学生を想定すると、勉強もスポーツもできて、下手すると

“天狗”になっているかもしれない生徒は何割くらいだろうか？それを1割とすると、それ以外の生徒の多くは、“自分はその人ほどできないし…”といった不要な劣等感を獲得させるのに貢献したであろうと理解できる。そうしてトータルで「日本の若者は」と見れば、圧倒的にその平均値は“自尊心が低い”ということになっている可能性が否定できない。“ほめる”の弊害があることをほとんど検討することなく、無批判に実行してきた成果のように見える。

他方、STEP(*)的に言えば、“学習”は“誰の問題か”というところ、もちろん“子どもの問題”である。が、先生たちと親が「勉強しろ」と言う。そうすると、勉強するという“問題”は“子どもの問題”から“先生や親の問題”に移行する。そこには、子どもが“学業”は“自分の問題”として主体的に引き受ける機会も奪われるし、しかも、その結果で“ほめ”られたり“叱られ”たりすることで、ますます誰のために勉強するのか、余計曖昧なモノにしていく可能性もある。

ここで、あらためて、児童期前半くらいまでの子どもを想起してみよう。彼らは、好奇心の塊で、いろいろなことに挑戦したが、失敗を恐れなくまじさを持っている。しかし、自発的に何かをしたことで、叱られたり注意されたりが繰り返されると、やがて、自発的に自分の考えでやってみようという主体性を発揮することに躊躇するようになり、ついには依存的になり、親や先生の言うとおりにしていればいいや的な子どもも育つ。

余談だが、ひところ“早寝・早起き・朝ごはん”がもてはやされた。それを、例えば、中学校のPTA総会の最後のあいさつとして校長が、「保護者のみなさまに一つだけお願いして終わります。学校では先生方がしっかり勉強させますので、お家ではどうぞ“早寝・早起き・朝ごはん”、これをどうぞよろしく願います」などとやっていた。朝、起きて学校に間に合うように準備して出かけるのは、“誰の問題か”というところ、もちろん“子どもの問題”なのだ。朝ごはんに関しては、通常

(*)松崎教授は、積極的に責任感ある子どもに育てるセミナー「STEP」を、キャンパススタッフ訓練活用後、保護者・教師の関わりの質的変容支援に活用してきた。

の生活をしていれば、お願いしてやってもらうようなことなのだろうか？と疑問が湧く。しかし、そうして、先生が親を巻き込んで、

“子どもの問題”を“親の問題”にすり替えてしまい、ますます子どもはその主体性を発揮できない状況に手を貸してしまったので、余計始末が悪い。もちろん、先生たちに悪意はない。どちらかといえば、善意からの行為だ。善意からの行為ゆえ、“善意でやってやって何が悪い”のように、そのマイナス面に気づくこともないし、意識的に検討しようということにもならないのかもしれない。

だから、子ども自身に“自分の問題”への向き合わせ方を体験させるようにそれを委ねつつ、自分の生活も自分でコーディネートすることができていることが“主体的に生きる”ことになる。そうやれている自分を“これでよし/Good enough”と自己価値感情を持てていて、結果的に主体性も自尊感情も良く育っていることを意味するはずだ。

どうも多くの教育関係者は、経験からより良い行動を学ぶ力があるという、そういう力を子どもがもっているという“子どもの能力への信頼”が低いように見える。と言っても、その信頼は、子どもは何でもできると過信することではない。失敗を含めて経験からより良い学びをもたらす力をもっていると信じるということだ。“勇気づけ”の基本原則は、身近な大人が自分の力を信じてくれて、自分でもその力を信じることができるとき、持てている力を発揮することができると考える。いろいろと教え込もうとしたりほめたり叱ったりしてコントロールしようとするということは、子どもはそうされないと自分ではちゃんとできない存在だと子どもの力を見くびっているように見える。柳平がEducationの訳語を「教育」としたことを誤訳であるとし、才能を引き出す意味合いがそこには存在しないと指摘するように、それが引き出されるには、その能力への信頼があつてこそである。

2022年4月から成人年齢が18歳となる。教育や子育ての最終目標は、もちろん“自立”

であり、そこへ向けての支援をしているはずが、上述の不登校だけでなく、“ひきこもり”“NEET”など生み出してきた。それが20世紀の教育だとすると、このままそれを引きずり続けるのであろうか？アドラー心理学では、人の精神的健康を損なう最大の要因はタテの人間関係だと指摘する(岸見, 1999)が、それを修正することは不可能なのだろうか？SDGsの目標4:「質の高い教育をどの子にも」との兼ね合いでも、あと数10年かけて何とかまっとうな公教育に修正することはできないのだろうか？

PDCAサイクルで考えたとき、理念や目標(P)を具現化することのできる方法(D)がミスマッチ状態ゆえ、国際調査の結果(C)がその証左ならば、今後の教育のあり方をどう修正/改善(A)すればいいのだろうか？

文献

- ・Dinkmeyer, D. & McKay, G. D. 1976 *Systematic Training for Effective Parenting: Parent's handbook*. Circle Pines, Minnesota: American Guidance Service, Inc. (柳平彬(訳) 1982 子どもを伸ばす勇気づけセミナー: STEPハンドブック1・2 発心社)
- ・河村茂雄 1999 Q-Uアンケートの手引き 図書文化社
- ・伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- ・伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博 2011 自尊感情の3様態—自尊源の随伴性と充足感からの整理— 心理学研究, 81, 560-568.
- ・岸見一郎 1999 アドラー心理学入門 K Kベストセラーズ
- ・文部科学省 2020 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm (2020/12/29)
- ・Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.